

2024年9月29日 スチュワードシップ月間⑤

説教題「主の愛に応えて」ヨハネ福音書12章1〜8節

主任牧師 加藤 誠

**「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのだから」(ヨハネ福音書12章8節)**

私たちはなぜ献金をするのでしょうか？ 旧約聖書を開くと、人びとは神に対してさまざまなささげものをしています。感謝したり、願いごとをしたり、献身や信仰告白をあわらしたり。そこに共通しているのは「神の愛への応答」であり「先立つ神の恵みへの信頼」です。アブラハムは先立つ神の恵みを信じて、見知らぬ土地への旅に出かけました。モーセはエジプト王の前では何もできない自分の無力を知りながら「わたしがあなたと共に行く！」という神の約束を杖として出かけました。アブラハムもモーセも「この世界をわたしと共に歩もう！」という神の愛の呼びかけに答えて、自分自身をささげて「神と共に」歩んだのです。それは覚悟、信仰を求められる歩みでしたけれども「喜び」の旅でした。なぜなら神の愛と恵みと祝福を握りしめて歩む旅だからです。私たちは空しいものを握りしめる旅ではなく、日々命を与え、励ましと慰めをくださる神の愛と恵みを握りしめて歩む旅に招かれているのです。

旧約の人びとは「十分の一のささげもの」を大切にしました。アブラハムもヤコブもレビ人たちも「十分の一」を神のために最初に取り分けました。「十分の一」は「わたしの手の中のもの、すべては神さまからのいただききものです！」という告白です。「わたしが使いたいことに使った残りを神さまにささげる」のではなく、「すべては神さまからの賜物、それを使わせていただく感謝」が「十分の一」の意味でした。

新約の時代、主イエスがささげものについて語った箇所では有名なのはエルサレム神殿でレプトン銅貨を二枚ささげた貧しいやもめを見て「この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた」と語られた箇所でしょう。金額の大きい少ないではない。そこに主なる神への真摯な祈り、神への愛がどれだけ込められているかが何より重要だと言われたのです。この主イエスの言葉は、私たちには耳に痛いものです。人間の世界では、献金でも募金でも、私たちの心の貧しさの故に「金額の多寡」に目が行ってしまふ。多額の献金や募金をしている人の名前が大きく記されて「すごいな」となる。しかし神は金額の多寡ではない。そこに真摯な祈りと信仰と愛が、どれだけ込められているかを問題にされるのです。

そのため、主イエスは「日々自分を捨て、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」と招かれています。「あなたの中でどれだけ神さまを大きくできているか。自分の思い、願いを神さまに聞き届けてもらうためではなく、自分が神さまに何をささげていけるのか。献金をたくさんできたなら、それはただただ神さまを賛美するため。

万が一にも、心の中で献金をできた自分を誇るなら、そのような献金は神の前では何の意味もない。自分を誇るのではなく、神を誇り、神を賛美し、神に従う信仰が問われているのだ！…と教えてくださったのです。

さて、今朝はヨハネ 12 章「ベタニヤで香油を注がれる」という場面を開きました。主イエスに香油をささげた女性の話は四つの福音書でそれぞれ印象深く語られています。ルカでは、その町の罪深い女が主イエスの足に香油を注いで泣きながら自分の髪の毛でぬぐったところ、「この女がどんな女分かっているのか！」と主イエスに非難が向けられています。マルコとマタイでは名もない女性が主イエスの頭に香油を注いだところ、今日のヨハネと同じように「なんという無駄遣いするのか！この香油を売って貧しい人たちに施せたのに！」と非難が向けられます。いずれのエピソードに共通しているのは「非難」です。その女性が自分の香油をどう使おうと本人の自由であって誰も口出しできないはずなのに、何とも薄汚れた人間の心の貧しさがあぶりだされている話です。そこには「自分は持つことのできない高価な香油をもっている女性」へのやっかみ、しかも「大胆にすべてを主イエスに注いでしまう女性の思い切りよさ」へのやっかみも隠れているように感じますし、「男たちの女性に対する上から目線」も感じます。その中でただひとり主イエスだけは、この女性の行為に込められた深い祈りと神への感謝をまっすぐに受け止められたのでした。

今朝のヨハネ福音書の場合、主イエスに香油を注いだ女性はマルタとラザロの姉妹、マリアであると紹介されています。この直前の 11 章でラザロは死の墓から主イエスによってよみがえらされました。このラザロ復活事件がエルサレムの都で大評判となり、人びとのイエスに対する熱狂ぶりに危機感を覚えた指導者たちが、イエスを殺し、さらにはラザロも殺そうと話し合うのです。立派な地位にありながら心の中にどす黒い思いを抱えた人間の救いがたさを知らされます。しかし、その悪に染まりきった人間を救うために、主イエスはご自身の命を十字架に投げ出されました。30 歳そこそこの若い貴い命を…です。「何とと言う無駄遣いをするのか！」。この言葉は主イエスの十字架に向けられるべき言葉です。主イエスは救いがたい罪に沈む私たちを救うためにご自身の命を「無駄遣い」されたのでした。そしてマリアだけがこの主イエスの私たちに対する真実の深い愛を感じ取って、「主の愛への応答として」自分にできる最上のささげものをあらわしたのでした。

聖書のすべては、十字架にあらわされた主イエスの真実の愛を証しするために書かれたものであり、聖書は私たちがこの十字架の主の愛に対してどのような祈りをもって応えていくのかを問うています。私たちの心の真ん中に「主の愛に答えて生きる」という目的が明確になっているのでしょうか。今年のスチュワードシップのテーマ「主イエスの恵みを生きる」を改めて自分なりの言葉で言い表しつつ歩いていきましょう。